

【暗唱聖句】詩篇 84:3 「主の庭を慕って、わたしの魂は絶え入りそうです。命の神に向かって、わたしの身も心も叫びます」

【日曜日・疲れ切って】

**創世記 2:2、3 「第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なされた。2:3 この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なされたので、第七の日を神は祝福し、聖別された」**

神様は、天地創造の最後の日を仕事を離れ、安息されました。そしてこの日を想像の記念日として祝福し聖別されました。この世の業を離れて休むための日を、創造の初めから神様は設けられたのです。神様は休みを必要とされる方ではありませんから、この特別な日は、私たち人間のために設けてくださったことがわかります。私たちには深い休息が必要だからです。それは心身の休みばかりでなく、霊的な休みでもあります。安息日に神様を礼拝し、自分が創造主によって造られた存在であることを確認し、深き霊的な交わりの中に入ることによって、この安息日の特別な祝福の中に入って行き、魂の安らぎを得るのです。

ところが、現代人の多くは休むことなく働き続けています。便利な生活家電が揃い、一人ひとりがコンピューターを手にし、一昔前には想像できなかったほどの速さで物事を処理することができるようになって、それによって休みが得られるようになったかといえば、むしろ逆に新たな仕事は増え、さらに忙しくなっているような感じさえします。

**マルコ 6:31 「イエスは、「さあ、あなたがただで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい」と言われた。出入りする人が多くて、食事をする暇もなかったからである」**

イエス様は、私たちに休むように言われています。それが神様のための働きであったとしても、休むことなしに続けることはできません。例話「牧師の休日に聖書研究」

**詩篇 4:9 「平和のうちに身を横たえ、わたしは眠ります。主よ、あなただけが、確かにわたしをここに住まわせてくださるのです」**肉体的な休みは、何もしないでゆっくり体を休めることが大切です。心の休みであれば、自然の中に入ったり、趣味の時間を楽しんだり、何かリフレッシュすると良いでしょう。しかし、霊的な休み、魂の休みは主だけが与えることができます。主は私たちをみもとに憩わせてくださり、私たちは平和のうちに眠りにつくことができるのです。イエス様は、「**すべて重荷を負うて苦勞している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう…わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう**」(マタイ 11:28、29)と言われました。平安な毎日を生きて行くためには、このイエス様が与えて下さる休みが必要なのです。

このように私たちのために安息日を設けて下さったり、イエス様が弟子たちに「しばらく休むが良い」と言われたり、「すべて重荷を負うて苦勞している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」と言われたりしていることから、いかに人間にとって休みが必要であるか、神様はご存じであることがわかります。私たちも休みが大切だと知っています。それなのに、自ら休むことなく、走り続けてしまうことの何と多いことでしょうか。休むためには、決断が必要なこともあるのです。

【月曜日・空になっても走り続ける】

疲れは精神的なものから来る場合が少なくありません。希望も喜びもなく、感情が空になってしまったような状態でも走り続けなければならないとしたなら、本当に私たちは疲れ切ってしまうことでしょうか。預言者エレミヤの口述筆記者であったバラクは、エルサレムに神様の恐ろしい裁きがやってくることを聞かされたときの気持ちを次のように語っています。

『**ああ、災いだ。主は、わたしの苦しみに悲しみを加えられた。わたしは疲れ果てて呻き、安らぎを得ない。**』(エレミヤ 45:3)

バラクは苦しみと悲しみに襲われ、疲れ果ててうめくしかありませんでした。安らぎなどどこにもありませんでした。しかし、神様はエレミヤを通してバラクに、「わたしは建てたものを破壊し、植えたものを抜く。全世界をこのようにする」(エレミヤ 45:4)と答えられます。自分が建てたものを破壊するというのは、どんな気持ちができるものでしょうか。自分が植えたものを抜くというのは、どんな気持ちができるものでしょうか。うれしいはずがありません。それを望んでなされるわけではなく、そうせざるを得なくなされるのです。主は、「**あなたは自分に何か大きなことを期待しているのか。そのような期待を抱いてはならない…ただ、あなた**

の命だけは、どこへ行っても守り、あなたに与える」(エレミヤ 45:5) とだけ言われました。これがせめてもの慰めですが、私たちは神様の悲しみを共有させられることが、しばしばあります。それでも前に進んでいかなければならないのです。神様がなさることを信じ、神様にすべてを委ねるしかなく、そのとき安らぎが与えられます。

#### 【火曜日・旧約聖書における休みの定義】

旧約聖書で「休み」と訳されている言葉は複数あります。創世記 2:2, 3 で「安息された」と訳されている言葉は、「シャバット」と言い、この名詞が「サバース」です。この言葉には、今までしてきたことを止める、断ち切るという強い意味があり、それにより安息に入ります。出エジプト 20:11 の十戒の第 4 条で、神様が七日目に休まれたという言葉は、「ヌアク」という言葉が使われており、平和のゆえに休める、安心してというシャカットという言葉もあります。この他にも、休みに関係する言葉がまだあり、これは人間にとって休みが肉体的にも精神的にも霊的にも、様々な面で必要であり、毎日の生活に影響を与えるものであることを物語っています。

#### 【水曜日・新約聖書における休み】

新約聖書でも複数の「休み」という言葉が使われています。イエス様が重荷を負って疲れた者を休めさせてあげようと言われた言葉は、「アナパウオー」で、「休む、リラックスする、元気づける」という意味があります。この他にも、静かな落ち着いた生活と言う意味合いのある「ヘシュカゾー」という言葉や、旧約聖書のシャバットとの関連で「カタパウオー」という言葉が用いられています。

#### 【木曜日・休みなくさすらう者】

主はカインに、「お前は地上をさまよい、さすらう者となる。」(創世記 4:12) と言われました。英語の新国際訳では「休みなくさすらう者」と訳されています。「休みなく、さすらう」とはぞっとする表現です。しかし、実際多くの人々がこのように生きているのではないのでしょうか。神様はそうさせたのではなく、カインがその原因を作ったのです。カインがこのような状態に陥った原因は 2 つありました。一つは弟のアベルを殺し、それを悔い改めることなく、赦されることもなくいたことです。神様から罪の赦しを与えられなければ、神様との間に平和を築くことができません。神様との間に平和がないと、休みなく、さすらうことになります。罪責感に苦しむのもその一つです。

もう一つは、自分の力で救いを得ようとしたことでした。カインは畑の収穫物を主の御前を捧げたわけですが、それは自分の努力や功績を誇示することに他なりません。犠牲の供え物を捧げるのは、自分の弱さを承認することだと感じました。カインの心の中には、サタンと同じ精神である傲慢さがありました。主はカインに言われました。

**「…罪は戸口で待ち伏せして、あなたを恋い慕っている。だが、あなたは、それを治めるべきである。」創世記 4:7**

自分の力で救いを得ようとするのなら、罪をすべて自分の力で治めなければならなくなります。それはもちろん不可能なことであり、その重荷により平安を失い、休みなくさすらうことになるのです。